

華人經濟 經營研究

～彼れを知らず己れを知らざれば戦う毎に必ず殆うし～

中国本土からアジア地域、そして世界にまで活動範囲を拡大するチャイニーズ。彼らのビジネスに対する考え方や習慣は日本人からすると異質にして独特で、理解しづらいものだといわれている。チャイニーズを総合的に「華人」ととらえ、彼らの多様な伝統文化と長い歴史から導き出された経営思想、心理と行動を体系的に分析し、華人圏や中国への進出に伴う総合的なノウハウを学び合う関西日本香港協会のみなさんの研究の成果を紹介する。

深圳「南巡講話」跡 訪問記(2)

鄧小平 V S 陳雲

鄧小平の改革開放路線に反対した保守派のトップは陳雲であった。彼は終始計画経済の信奉者であった。2人は1930年代の共産党初期から深く関係しながら、ともに党の利益に貢献してきた。毛沢東の大躍進政策に反対して、ともに更迭された。しかし、81と82年にかけて両者の路線に亀裂が生じ始めたのである。

陳雲は年令が1つ若いにもかかわらず鄧小平よりも21年も早く中央委員に選出されている。しかも当時全盛であった計画経済の旗手としてインフレ抑制に手腕を発揮して党内の影響力は絶大であった。特に長老の多くは陳雲派であった。幼

小の頃に極貧であったため資本家と資本主義に対する不信感も根強かった。これに対して鄧小平は「社会主義とは生産力を回復し、国力を増強、国民生活を向上させること」として貧困からの脱出を最優先とした。理論より実践、市場最優先、企業で言えば現場主義であった。

小の頃に極貧であったため資本家と資本主義に対する不信感も根強かった。これに対して鄧小平は「社会主義とは生産力を回復し、国力を増強、国民生活を向上させること」として貧困からの脱出を最優先とした。理論より実践、市場最優先、企業で言えば現場主義であった。

「社会主義とは生産力を回復し、国力を増強、国民生活を向上させること」として貧困からの脱出を最優先とした。理論より実践、市場最優先、企業で言えば現場主義であった。

南巡講話の成果

2年に国家主席就任後直ちに深圳を訪問している。これに対して89年以来総書記であった江沢民は鄧小平・陳雲両路線の間でゆれ動いていた。右に左に力の均衡を推し量った発言が多く残っている。そのため後継者として任命した鄧小平はかなりの不信感を持った時期があった。それでも機を見るに敏な江沢民は南巡講話の反響の大きさをみて、いち早く鄧小平支持を表明した。この時期は第8次5カ年計画(91と95年)の最中であり、インフレ抑制を重要目標とする保守派は当初年6%の経済成長率としていた。南巡講話以降は妥協の産物として8と9%と定められた。それでも成長率の実績は下記のようになっていた。従来の計画経済からの決別であった。この後の20年間はマスコミで大きく取り上げられた通り、年率8と12%の成長が続く、ようやく2012年当たりから7%台に下がってきた(しかも89年の天安門事件直後の2年間の中国への海外直接投資額が40億ドルに減少したが92年から99年には毎年350億ドルに増加した。鄧小平は南巡講話の半年後には早くも今後の課題として農村の体制、統治制度、国家安全保障、鄧自身の役割を挙げている。最終回は「後世に残された課題」について報告する。

	鄧小平(1904~97)	陳雲(1905~95)
出身	四川省広安県(親は地主)	上海(親は貧困層)
政治方針	民主集中制(共産党独裁)	民主集中制(共産党独裁)
経済政策	改革開放	計画経済(インフレ抑制)
持論	白猫黒猫論(白猫でも黒猫でもネズミを捕る猫はいい猫だ)＝市場経済	鳥籠論(鳥籠の中で羽ばたかせる)＝計画経済
外交	全方位	ソ連・東欧(欧米には無関心)
購読紙	15紙	「人民日報」のみ
性格	動	静

年	1991	1992	1993	1994	1995
GDP成長率(%)	9.2	14.2	13.5	12.6	10.5

【藤澤慶彦(ふじさわよしひこ)さん】
日本香港協会理事、サカイオーベックス株式会社特別顧問。1962年スタンフォード大学政治学部卒(専攻:中国共産党史)。1963年慶応義塾大学法学部卒(中国の第1次5カ年計画)同年東レ入社、1967年東レNY駐在、79年マレーシア/香港会社出向、85年テキスタイル貿易部長(英コートールズ社買収・新工場建設担当)、95年取締役(南通とチェコの織物工場建設担当)、97年常務取締役貿易部門長、98年在ヨーロッパ東レ代表、2001年東レインターナショナル監査役。